<table>
<thead>
<tr>
<th><strong>Title</strong></th>
<th>〈紹介〉滝川幸司著『菅原道真論』</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td><strong>Author(s)</strong></td>
<td>黒田, 翔子</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Citation</strong></td>
<td>語文. 104 P.67-P.69</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Issue Date</strong></td>
<td>2015-06-30</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Text Version</strong></td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td><strong>URL</strong></td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/11094/70958">http://hdl.handle.net/11094/70958</a></td>
</tr>
<tr>
<td><strong>DOI</strong></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td><strong>rights</strong></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td><strong>Note</strong></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>
記事が、宮廷詩宴に限るようになってきたことを指摘する。
そして、宮廷詩宴の儀式として律令秩序の中に取り込まれ、天皇の権威を顕示するものとして確立したことを明らかにした。すなわち宮廷詩宴での賦詩は、「秩序維持の方策の一端」（五六頁）として機能していた。

「詩人論は否定的に描われていた宮廷詩宴の献詩」（五頁）を再評価した。「詩人無用論」が呼ばれる中、四月九月の後朝宴での詩序を最後に、道真の詩に「詩中」という色彩が見られなくなることを指摘する。そして翌寛平五年に参議に任じられて以降、急激に官位昇進し政務に携わらざるを得ない状況となった。「詩中」であり続けることに挫折したのだと結論付けられることなり、『詩中』でもその後を追うことに努力することになる。

第２編では、道真が交流した詩人たちについて考察する。まず、撰集家のとの関わりを取り上げる。道真が基経道文事において、基経家から詩の敬意を示すことを目指す。また、時平との関係についても、先に述べたとおり、道真を考察の対象とした人物は、文学史に無名に等しく、先の研究においても辞書的な説明に留まる場合が多い。著者は、こ

特に、差し違える記述から、「俗世間に背を向けた風月詩人」とも表し、その詩は、「詩中」と表すように道真を指摘した。

第３編では、道真の祖父に属する清父・清父・清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属する清父に属る
曖昧さを指摘する。したがって、「詩人無用」論は、「儒家としての枠組みを超えて詩人たろうとしたこと」（六一四頁）への批判であり、これに対して道真は、「詩臣」を模倣することことで、昇進とは直結しない詩作を、「公事をして位置づけ」（六一四頁）ようにしたのだと結論付けた。

本書の白眉は、道真を横軸・縦軸から照射するため、文学にとどまらず歴史学の知見をも踏まえて、丹念に考察している点であろう。巻末に索引を備えており、資料としても活用可能な有用の書である。

（塙書房、二〇一四年一〇月二〇日、七一四頁、二三〇〇〇円）